

ド  
ナ  
二  
髪  
パ  
ツ

ラ  
ナ  
人  
（  
ツ

マ  
リ  
の  
）

シ  
オ  
茶  
ヤ

・

雪姫

○ 古い団地（外観）

朝。

○ 玄関ドア。

表札に「二階堂みさき・あき」の名。

○ 二階堂家・茶の間

狭い部屋に不似合いの大きなグランドピアノが置いてある。

やけにピカピカ。

たんすの上に数個の写真立て。

金髪の少女が赤ん坊を抱いている写真。

みさき（三十二）の鼻歌が聞こえている。

曲は八十年代に流行った「横浜銀蠅」。

○ 同・洗面所

赤とピンクの歯ブラシが二本。

みさきが歌いながら髪を束ねている。

茶髪に化粧気のない顔。

ふと、鏡を覗く。

みさき「（鼻の下に手をやり）ヤバ。ヒゲはえてるよ……ま、いつか」

○ 同・寝室兼あきの部屋

学習机。二組の布団。

一つはすでにたたまれ、片方に娘のあき（十五）が寝ている。

みさきの声「あき！っ！遅刻遅刻！」

あき「（布団にくるまり）う-ん、まだ眠い……」

ガラッと襖が開いて、みさきが入ってくる。

みさき「（思い切り布団をはがし）ほら、さっさと起きる！」

あき「何だよ……もう少し優しく起こせないのかよ。それでも母親？」

みさき「甘ったれたこと言ってんじゃないよ。もうおかあちゃん仕事行くよ」

○ 同・台所

立ったまま食パンを口にくわえるみさき。

ジャムの蓋をあけようとするが——きつくてあかない。

みさき「……けっ」

あきらめてパンをそのままムシャムシャとかじるみさき。

あきが起きてくる。

みさき「今日ピアノの日だろ？さぼるんじゃないよ」

あき「……（無視して自分のパンを焼く）」

みさき「おかあちゃん、発表会楽しみにしてっからさ。ねっ！」

あき「（思いつめたように）おかあちゃん、あのさ……」

みさき「ちゃんとしっかり食べてくんだよ。朝礼で倒れちゃうからね」

あき「わかってる……」

みさき「あ、それとゴミ出しといて。頼んだよ。じゃ、行ってきまーす！」

慌ただしくバタバタと出ていくみさき。

あき「（ため息）……」

焼けたパンを取り出し、ジャムの蓋をあげようとするあき。

が……やはりあかない。

### ○ 団地の階段

歌いながらかけおけるみさき。

入れ違いに主婦（五十五）が上ってくる。

みさき「おはようございます！」

主婦「おはよう、いつも元気ね」

みさき「はい！それだけが取り得なもんで。行ってきます！」

主婦「行ってらっしゃい」

と見送る。

### ○ 車の中

テープを差し込むみさき。

流れてくるのは「横浜銀蠅」。

機嫌良く歌いながら運転するみさき。

ルームミラーの横。あきが作ったマスコット人形が揺れている。

人形の胸のところに「おかあちゃん」と縫い付けてある。

### ○ ゴミ集積場

ゴミ袋を置くあき。

あきの同級生、美穂（十五）が父親と二人で来る。

父親「じゃあな、美穂」

ゴミを置いて出勤していく父親。

美穂「行ってらっしゃい」

あき「（見ている）……」

美穂「おはよう、あき」

あき「（明るく）おはよう」

連れだって学校に向かう二人。

○ 車の中

信号待ちで停車している。

車窓の外。

出勤する夫に妻子が手を振っている。仲良さそう。

複雑な表情でその家族を見ているみさき。

信号が青に変わる。

車を発進させるみさき。

○ 小田島運輸・倉庫

トラックに荷物を積み込んでいるみさき。

社長の小田島（五十八）が話しかけてくる。

小田島「みさきよ。おめえんこのあれ、あきちゃん、いくつになった？」

みさき「（手は止めず）十五です」

小田島「もうそんなになるか。ということは……？おめえはもう三十……（計算する）」

みさき「（嫌々と）一応、二です」

小田島「まあなんでもいいけどよ。俺も年取るわけだ。なあ。それにしてもよ。おめえが初めてうちに来たときは、どうしようもねえ不良娘だったっけなあ」

みさき「大昔のことですよ」

小田島「ところでおめえ。男はいねえのか、男は。いつまでも一人じゃ大変だろ。いろいろとな」

みさき「男なんてもうコリゴリですよ。いいんです。娘さえいてくれれば」

小田島「コリゴリねえ・・あ、おい。こっちこっち」

呼ばれて、若生哲太（二十二）が走ってくる。

小田島「（みさきに）今日入った新人。おめえ、しばらく面倒みてやってくれや。（哲太に）じゃしっかり頼むぞ」

哲太「はいっ」

小田島、行く。

哲太「若生哲太です。よろしくお願いします」

みさき「（ぶっきら棒に）どうも」

黙々と荷物を積むみさき。最後の一箱——重い。

哲太「俺やりますよ」

みさき「いって」

哲太「せっかく男がいるんスから。（荷物を持ち）これは女の人には無理ですよ」

みさき「え、女ってあたしのこと？」

哲太「（笑って）当たり前じゃないですか」

みさき「（何となく照れ臭い）……」

テキパキ荷物を積む哲太。

○ 教室

休み時間。

美穂「あき、今日渋谷行かない？」

あき「（即座に）行きたい！」

みさきの声（今日ピアノの日だろ。さぼるんじゃないよ）

あき「（思い直して）やっぱり今日はだめ。ごめん……」

美穂「そ。じゃまたね」

あき「ん」

数人の友達と連れ立って出ていく美穂。

あき「……」

○ 公園

ベンチで休憩をしているみさきと哲太。

コンビニの袋から、ガサガサと弁当を取り出す哲太。

哲太「あー腹減った。」

みさきはお茶のみ。

哲太「（気付いて）あれ、先輩何も食わないんスか？」

みさき「ん、いいの」

哲太「いいのって……それじゃもたないっスよ。まだ荷物いっぱい残ってるし」

みさき「給料日前はちょっと苦しいからさ。節約節約。あ、気にしないで食べて」

哲太「……」

余分に買っていたおにぎりを袋から取り出し、差し出す哲太。

哲太「もし良かったらどうぞ」

みさき「（素直に）いいの？じゃ遠慮なく」

早速、おにぎりにパクつくみさき。

哲太「（微笑して、自分も食べ始める）一つ聞いていいですか」

みさき「なに？」

哲太「先輩は何でこんなきつい仕事してるんですか」

みさき「何でって、生活かかっているからね」

哲太「女の人だったら、なんつーか普通のOLとか、花屋とか、ケーキ屋とか、とにかくもっと楽できれいな仕事いろいろあるじゃないですか。こういっちゃ何ですけど、やっぱり金ですか。まそれにしたって割が合わないと思うけどな」

みさき「……」

二人の前を、女子高生の集団が通り過ぎる。

みさき「あれくらいの頃なんだ。私が娘生んだの」

哲太「え？」

みさき「不良だったからね、高校には行ってなかったけど。相手の男がヤクザの卵みたいなろくでもない奴でさ……私ね。娘を生もうって決めたとき、誓ったんだ。この子を絶対きちんと育ててみせる。誰の世話にもならない。一人で何不自由なく育てるんだって」

哲太「……」

みさき「大体さ。私バカだから頭使う仕事はできないし、この通り色気もないし。

結構この仕事向いてるんだよね」

哲太「（しみじみと）強いんスね」

みさき「え？」

哲太「強い女性って……いいですよ。そのへんのチャラチャラしてる女より全然いいですよ」

みさき「（動揺して）う、うちの娘さ。三才からピアノやらせてんだ」

哲太「へえ、ピアノスか。上品スね」

みさき「ガキの頃、ピアノ習ってる友達がすごいうらやましかった。うちは貧乏で兄弟も多かったからそんな余裕なくて。だから、自分の子供には絶対ピアノを習わせようって、それが夢だったんだ。金かかって大変だけどね。ま、娘のためなら苦になんないから——ごちそうさん」  
手をパンパンと叩くみさき。

○ 鍵盤

ピアノを弾くあきの手。

上から別の手が伸びてきて、バーンと鍵盤を叩く。

ピアノ講師「全然できてないじゃない。ちゃんと練習してるの？」

あき「(うなだれて)……」

ピアノ講師「こんな調子じゃ発表会に出すわけにはいかないわよ」

○ 道

夕暮れ。あきがトボトボ歩いている。

ピアノ講師の声(こんなこと言うのは講師として無責任かもしれないけど、二階堂さん、あまりピアノには向いてないんじゃないかしら。やる気のない子には指導したくないのよね私。やめるなら早い方がいいと思うけど)

あき「……」

あきの横を、買い物帰りらしい親子連れが通り過ぎる。

母親と中学生の女の子。

娘「お母さん、ケーキ食べて帰らない？」

母親「いいわね」

うらやましそうに振り返って親子連れを見るあき。

○ 二階同家・台所

夕食を作っているあき。

みさき「ただいまーっ」

と、みさきが帰ってくる。

あき「お帰り」

みさき「今日ピアノどうだった？ちゃんと行っただろうね」

あき「うん……(言葉を濁す)」

みさき「(ピアノを見て)ところであんた最近、ピアノの練習してんの？」

あき「今、試験だから……」

みさき「試験も大事だけどさ。ピアノもちゃんとやんなよ。おかあちゃんそのために昼食代けちって月謝払ってんだから。ねっ」

あき「……」

みさき「(覗き込んで)おっ、うまそうじゃん。着替えてくるワ」

○ 同・茶の間

食卓を囲むみさきとあき。

あき「ねえおかあちゃん」

みさき「ん？」

あき「おかあちゃん、毎日仕事ばかりしてて楽しい？」

みさき「楽しいもクソも、稼がなきゃ食ってけねえだろうが」

あき「おかあちゃんさ……何で私を生んだの」

みさき「何でって腹に入っちゃったもん、しょうがないじゃないか」

あき「だってまだ十八才だったんでしょ。おろすじゃん、フツウ」

みさき「（呆れて）おまえね……子供が親に言う言葉かそれが」

あき「……（思い切って）おかあちゃん、たまにはさ。二人で買い物とか行かない？」

みさき「買い物？何それ。いつも団地のスーパーに行ってるじゃん」

あき「そうじゃなくて。デパートで私とおかあちゃんの服買って、外で食事してさ、あっ、ケーキも食べたい」

みさき「ばっかじゃないの。服だのケーキだのって、うちにそんな贅沢できる余裕があるわけないだろ。どこから金持ってくるんだよ」

あき「ケチ！」

みさき「はいはい、ケチで結構」

無然として台所に立つあき。

みさき「（テレビを見ながら）あき、ちょっとお代わりちょうだい」

あき「自分でやれば！」

みさき「反抗期！」

無然とした表情のままのあき。

## ○ 道

あるアパートの前。

みさきの運転する小田島運輸のトラックが停車する。助手席には哲太。

みさき「ここで最後だから私が行ってくる。待ってて」

哲太「はい」

トラックから降りるみさき。

## ○ アパート・通路

荷物を抱えたみさきが来る。

配達表と表札を交互に見ながら歩く。

あるドアの前で立ち止まる。

チャイムを押す。

中から不気味な感じの男（三十八）が顔を出す。

みさき「中村さんですね？お荷物です」

みさきを異様にジロジロ見る男。

みさき「あの、ハンコお願いします」

無言で奥に行く男。

○ トラックの中

一服する哲太。

○ アパート・ドアの前

イライラしながら男を待つみさき。

みさき「（奥に）あのう、まだですかあ」

ようやく男が来る。

ハンコを差し出す。

受け取ろうとするみさき。

突然、みさきの手を掴み、みさきを抱きよせようとする男。

驚くみさき。

○ トラックの中

時計を見る哲太。

「遅いな」という風にアパートを見上げる。

トラックを降りる哲太。

○ アパート・玄関

男から離れようと必死でもがくみさき。

みさき「やめて下さい！」

男「（みさきの耳元で）ちょっとだから、ね。おたくも若い子みたいにキイキイ騒ぐんじゃないよ」

強引にみさきを室内に連れ込もうとする男。

みさき「やめてってば！」

ドアが閉まる寸前に駆けつける哲太。

慌てて助けに入る。

哲太「やめろ、離せ！」

男を突き飛ばし、みさきの手を取って駆け出す哲太。

○ 停車中のトラック

トラックに飛び乗るみさきと哲太。

すぐにトラックを発進させる哲太。

○ 道端

自動販売機でジュースを買い、みさきに差し出す哲太。

みさき「サンキュ」

哲太「大丈夫ですか」

みさき「（肯く）」

哲太「しかしあの野郎ムカツクなあ。訴えてやりますか」

みさき「あんたがそんなにアツくなることないでしょ」

哲太「先輩、腹立たないんですか」

みさき「たまにあるからね、こういうの」

哲太「（驚いて）そうなんですか？」

みさき「女一人で生きてるとま、いろいろあるから」

哲太「そんな……危ないっスよ」

みさき「あの……さ」

哲太「はい？」

みさき「ありがとね。助けて……くれてさ」

哲太「当たり前じゃないですか。男として当然ですよ」

みさき「……今日飲みに行こうか」

哲太「え？」

みさき「付き合っよ、ね、決まり！（と、哲太の肩を叩く）さ、さっさと終わらせちゃおう！」

張り切ってトラックに乗り込むみさき。

あとに続く哲太。

○ ピアノ教室・ドアの前

あきが立っている。

入ろうかどうしようか迷っている。

ドアノブに手をかけるあき。

ピアノ講師の声（やめるんなら早い方がいいんじゃない）

手を離して引き返すあき。

○ 道

あきがうなだれた調子で歩いている。

美穂と数人の友達が来る。

美穂「あき！」

あき「美穂……みんなも」

美穂「私たち今から遊びに行くんだ。静香がおもしろいところ知ってるんだって。

あきも一緒に行かない？」

あき「（喜んで）行く行く！」

○ クラブ・中

激しい音楽。

踊っている若者たち。

一人、ソファに座って休んでいるあき。

美穂が山口剛（十八）を連れてくる。

美穂「あき。剛くん、あんたのこと気にいったんだって」

あき「えっ……」

剛「どうも（と、軽い調子で）」

あき「（戸惑いながら）どうも……」

○ 居酒屋・カウンター

並んで飲んでいるみさきと哲太。

みさき「ここは私のおごり。どんどん飲んでよ。」

哲太「すみません。（ハッと気付いて）あっ、いやそんな。いいですよ。俺も払いますから」

みさき「大丈夫大丈夫、心配しないでもここはツケきくから。ほら飲む飲む！」

哲太のグラスにビールを注ぎ足すみさき。

恐縮しながら受ける哲太。

みさき「ところでさ、私も一度聞こうと思ってたんだけど、あんた何でうちでバイトしてるわけ？あんだったら、見てくれもいいし、もっとまじな仕事いく

らでもあるんじゃないの」

哲太「俺、こう見えても役者志望なんですよ」

みさき「役者？」

哲太「はい。一応小さい芸能事務所に所属してのるんです。でも回ってくるのはエキストラみたいなチョイ役ばっかですけどね。それだけじゃ食ってけないんで」

みさき「そうなんだ……じゃあ私は今、将来の大スターと飲んでるかもしれないってわけか。今のうちにサインもらっとこうかな」

哲太「（投げやりに）いや、最近はもう半分あきらめてるというか」

みさき「なんで？」

哲太「才能ないみたいです。俺。オーディションは受けても受けてもおっこちてばっかだし。世の中そんなに甘くないってことがわかりました。もういいんですよ。夢は夢で」

みさき「情けないなあ、若いのに。あのね。よく聞きなよ。私くらいの年になったらね。夢なんか持ちたくても持てなくなるんだよ。人間、年と共に可能性ってやつがどんどん狭くなってって、もう子供に夢を託すしかなくなっちゃうんだから。」

哲太「はあ……」

みさき「あんたなんかまだこれからじゃない。頑張んなよ。応援してっからさ」

哲太の肩を叩き、激励するみさき。

哲太「なんか先輩にそう言われるとその気になってきました。もう一回オーディション受けてみようかな。俺」

みさき「その調子！飲もう飲もう」

哲太「（突然気が付き）あ、でもいいんスか。もうこんな時間……娘さんが待ってるんじゃない……」

みさき「いいのいいの。あの子はしっかりしてるから。（おどけて）なんていつでもこの通り、親の育て方がいいからさ。おじさん、ビール追加ね」  
盛り上がる二人。

## ○ 道（夜）

したたかに酔ってフラフラの哲太。

哲太を支えるように歩くみさき。

みさき「ほらしっかりしろって。……ったく、ビールだけでこんなに酔っ払うか？フツウ……」

哲太「あ。ここです。俺んちここです」

通り沿いのアパートを指差す哲太。

みさき「あ、ここね。ほい。じゃ、明日遅刻すんなよ」

と、階段の下に哲太を置いて、行きかけるみさき。

哲太「せんぱい」

突然、みさきに抱き付く哲太。

みさき「（驚いて）！」

哲太「俺、先輩のこと好きになりそうっスよ」

みさき「ちょ、ちょっと……」

哲太「じゃ、おやすみなさい」

フラフラとアパートの階段を上っていく哲太。

みさき「……」

### ○団地・通路

みさきが歩いてくる。

先程の出来事にまだどこか呆然としている。

ドアの前で立ち止まる。

チャイムを押すが誰も出てこない。

いぶかしげに鍵を取り出し、ドアをあけるみさき。

### ○ 二階堂家・茶の間

真っ暗で誰もいない室内。

明かりをつけるみさき。

みさき「あき？」

家中を回ってあきを探すみさき。

みさき「あき-っ！いないの？」

### ○ 道・夜

車が止まる。

中にあきと剛が乗っている。

### ○ 車内

あき「送ってくれてありがと」

剛「（じっとあきの眼を見つめる）……」

あき「……」

あきを引き寄せてキスをする剛。

あき「（驚いて眼を開けたまま）……」

剛「俺、君に本気になりそうだよ」

あき「うそ……」

剛「（真面目に）俺とつきあってくれる？」

あき「（戸惑いがちにうなずく）」

剛「（笑顔）よかった」

あき「じゃ……」

車を降りるあき。

剛「またね」

あき「バイバイ」

帰っていくあき。

剛の携帯電話が鳴る。

剛「（電話に出て）はい。ああ、朋美？いやヒマだよ。すっげーヒマ。今から？ああ、すぐ行くよ」

女からの電話らしい。

車を猛スピードで発進させる剛。

○二階堂家・茶の間

あきを心配しているみさき。

そこにあきが帰ってくる。

あき「なんだ、おかあちゃんいたの」

みさき「(怒って) いたのじゃないよ！今何時だと思ってんだ！中学生がふらふら出歩く時間じゃないだろ」

あき「うるさいなあ。いいじゃん別に」

みさき「何してたんだよ。こんな時間まで」

あき「……」

みさき「何してたって聞いてんだよ！」

あき「遊んでた」

みさき「誰と」

あき「美穂たちと」

みさき「あんたまさか、変なことしてたんじゃないだろうね。あんたはまだ中学生なんだからね。中学生。わかってんの？」

あき「おかあちゃんだって私くらいの頃はメチャメチャ遊んでたんでしょ？悪いことは全部やってきたっていつも自慢してんじゃん。私にばかりゴチャゴチャ言うのはずるくない？」

みさき「自分のことと、娘のことは違うの」

あき「勝手じゃん、そんなの」

みさき「おまえねー」

さっと自分の部屋に入ってしまうあき。

みさき「なんなんだよ、まったく……ほんと反抗期だね」  
と、吐き捨てるみさき。

○ 同・あきの部屋兼寝室

唇に手を当てるあき。

剛とのキスの余韻を感じている。

○ 同・浴室

鼻歌を歌いながら風呂に入っているみさき。

曲はまたまた「横浜銀蠅」。

ふと、哲太に抱きしめられた時の感触を思い出して……。

みさき「……」

○ 小田島急便・倉庫

みさきと哲太が荷積みの作業中。

二日酔いでかなり眠そうな哲太。

みさき「大丈夫？」

哲太「はい……。昨日はすみませんでした。つい飲み過ぎちゃって。先輩と一緒にだから安心しちゃったのかな」

みさき「ねえ、今日……。さ。うちこない？」

哲太「え？」

みさき「どうせ毎日ろくなもん食ってないんだろ。給料も入ったことだし、ごちそうするよ」

哲太「ほんとですか？嬉しいな。行きますよ。行かせて下さい」

### ○ 二階同家・茶の間

食卓で、みさき、あき、哲太の三人が焼き肉を食べている。

肉をパクパクと口に放り込む哲太。

その豪快な食べっぷりにあぐりとするみさきとあき。

哲太「うまいっすね。このタレがまた最高！あきちゃんが作ったんだって？」

あき「うん」

哲太「ほんとうまいよ。あきちゃん、将来いいお嫁さんになれるね」

あき「うちはおかあちゃんが料理苦手だから、ほとんど私が担当してんの」

哲太「へえ。いい娘さんですね」

みさき「私の生んだ子だからね」

あき「哲太さん、おかあちゃんの後輩なんですよ？こわくない？」

哲太「いや。なんで？」

あき「だって男みたいだし。腕なんかこんなぶつといんだよ」

みさき「うるせえな」

哲太「それはさ、先輩があきちゃんのお父さん役も兼ねてるからだろ。母子家庭のお母さんは大変なんだよ。俺んちもさ。親父が早くに死んでずっと母子家庭だったんだ。」

あき「そうなの？」

みさき「……」

哲太「やっぱりうちもお袋が朝から晩まで働いて、俺たち兄弟を育ててくれたから……。俺みたいなのが生意気かもしれないけど、先輩の気持ちよくわかるし、俺に何かできることがあったら、力になりたいんですよ」

みさき「（感動して）……」

あき「あ、タレがなくなっちゃったね、ちょっと待ってて」

と、台所に立つあき。

調味料の蓋があかない。

哲太「（その様子に気づき）どれ、貸してみ」

簡単にあけてしまう哲太。

あき「サンキュ。さすが」

みさき「（見て）……」

○ 同・寝室兼あきのへや

二組の布団が並べて敷かれている。

パジャマ姿のみさきとあき。

あきは机に向かっている。

みさき「あき」

あき「（ペンを動かしながら）ん？」

みさき「あきはさ……お父さん欲しい？」

あき「（ふりむいて）何。急に」

みさき「いや、別に……ちよっとね。聞いてみただけ、うん」

あき「おかあちゃん、まさかあの哲太って人と結婚しようとか考えてるの」

みさき「（ギクツとして）ま、まさか……なに言ってんだよ、バカ」

あき「冗談でしょ。あんな若い人が、おかあちゃんみたいな子持ちのババア相手にするわけないじゃん」

みさき「（ムツとして）ババアって、おまえ……」

あき「（興奮して）ほんとバカみたい。バカだよ、バカ。お母ちゃんさ、身の程わきまえた方がいいよ。ずっと男っ気がなかったからさ、免疫がないんだよ。久しぶりに男の人とちよっと仲良くなったからって、舞い上がっちゃってばかじゃないの」

みさき「（怒る）なんだ。親に対してその言い方は！」

あき「親だったら親らしくしろよ」

みさき「私のどこが親らしくないってんだよ、え？」

あき「うるさいなあ、勉強してんだからもう出てってよ！出てけ！」

あきの剣幕に負け、渋々部屋を出るみさき。

みさき「（懨然として）何なんだよ、クソツ……」

○ ゲームセンター・店内

あきが美穂たちと遊んでいる。

向こうに剛のグループもいる。

あきに向かって手を振る剛。

嬉しそうに答えるあき。

おもしろがってはやし立てる美保たち。

○ スーパーマーケット・店内

休日の午後。

買い物をするみさき。

ルンルンと楽しそう。

○ 二階堂家・台所

珍しくエプロン姿で台所に立っているみさき。

できあがった料理をタッパーに詰めている。上機嫌。

あきが来る。

あき「それどうすんの」

みさき「（鼻歌）あんたには関係ないでしょ……つと」

あき「？」

タッパーをハンカチで包むみさき。

みさき「ちょっと出かけてくるワ」

エプロンを外し、いそいそと出かけるみさき。

あき「（いぶかしげに見送る）……」

○哲太のアパート・室内

部屋でくつろいでいる哲太。

チャイムが鳴る。

哲太「はい」

玄関のドアを開ける哲太。

みさきが立っている。

驚く哲太。

哲太「先輩……どうしたんスか？」

みさき「ごめんね。突然。（弁当をさしだして）これ」

哲太「？」

みさき「一応私が作ったから。良かったら食べて。味は保証できないけど」

哲太「（戸惑いつつ受け取る）すみません……」

みさき「（ニコニコ）」

哲太「あ、あのう……入ります？散らかってますけど」

みさき「（少し迷って）いや、いい、いい。もう帰るからさ、じゃ」

背を向けて行ってしまふみさき。

哲太「（弁当を持ったまま呆然と見送る）……」

○ 道

歩くみさき。

みさき「（哲太のアパートを見上げ、独り言）入っちゃえばよかったかな……い

や、いくらなんでもまだ早いだろ……軽い女だと思われても何だしな……」

一人、ニヤニヤしながら歩くみさき。

○車が行き交う道路

○ トラック・中

運転するみさき。

○ ピアノ教室・中

レッスン中の講師。

みさき「こんにちはあ」

ドアが開いて、荷物を持ったみさきが入ってくる。

みさき「お荷物です」

ピアノ講師「ご苦労様」

みさき「（ニコニコして）いつもうちのあきがお世話になってます。あの、先生、

来週の発表会のことなんですけど、どんな服を着せたらいいでしょうかね。まさか去年と同じってわけにはいかないし、まあ無理しても新しいのを買ってやりたいなどは思ってるんですけどね……あの子、色が白いから淡い色が似合うんですよ。ピンクのワンピースなんかかわいいんじゃないかなあって……」

ひたすらしゃべり続けるみさき。

ピアノ講師「？」

○ 道～トラック

怒った表情で歩くみさき。

ピアノ講師の声（お母さん、ご存知なかったんですか？二階堂さん、先月でやめられたんですよ。本人から連絡があって、もう続けられなくなったからって……）

停車してあるトラックに乗り込むみさき。

発進。

○ 二階堂家・台所

夕食の支度をしているあき。

凄い形相をしたみさきが帰ってくる。

あき「（顔を上げず）お帰り。今日はギョーザだから」

みさき「あき」

あき「なに？」

みさき「ちよっとおかあちゃんの方、向きな」

あき「今、手が離せないよ」

みさき「いいからこっち来いって言ってんだよ！」

あきの手をつかみ、強引にあきを調理台から引き離すみさき。

みさき「あんた、ピアノやめたってどういうこと？」

あき「……」

みさき「おかあちゃんにわかるように説明しな！」

あき「（開き直って）嫌になったんだよ」

みさき「冗談じゃないよ。おかあちゃんが誰のためにきつい仕事してこんなに頑張ってるのかわかってんの！おかあちゃんはね、ただただあんたのために——」

あき「（大声で）もう嫌なんだよ！」

みさき「あき……」

あき「いつもいつも、あんたのためあんたのためって。恩着せがましいんだよ。大体ね、私にピアノなんて似合わないんだよ。もうお母ちゃんの夢を私に押し

付けるのはやめてよ。迷惑なんだよ！」

みさき「な、生意気言うんじゃないよ。人の苦勞もしらないで……」

あき「勝手に生んだんだろ！私が頼んだわけじゃないじゃん。勝手に生んで勝手に育ててきたくせに。全部自分勝手なんだよ」

思わずあきの頬をひっぱたいてしまうみさき。

あき「（頬を押さえ）私は……こんなうちに生まれたくなかった。もうたくさん！」

飛び出していくあき。

その場に呆然と立ちすくむみさき。

みさき「……」

ふとピアノに目をやり、蓋をあけ、鍵盤を指一本で叩いていくみさき。

音はデタラメ。

あきの声（もうおかあちゃんの夢を私におしつけるのはやめてよ。迷惑なんだよ！全部自分勝手なんだよ）

唇をかみしめるみさき。

涙があふれてくる。

○ 街（夜）

雑踏の中を歩くあき。

男たちが声をかけてくるが、無視して歩き続けるあき。

○ 哲太のアパート・ドアの前

立っているみさき。

哲太が階段を上ってくる。

みさきに気付く。

哲太「先輩？」

みさき「（うろたえて）あきが……あきが家出しちゃった。ねえ、どうしたらいい？」

思わず哲太にすがりつくみさき。

哲太「（驚き）先輩……」

哲太より少し遅れて麻衣子（二十）が来る。

麻衣子「どうしたの？哲ちゃん」

哲太「あ、いや……」

みさき「（驚いて）！」

パッと身体を離すみさき。

みさきを見て、きよとんとする麻衣子。

みさき「ごめん……帰るね」

逃げるように、背を向けて走り出すみさき。

哲太と麻衣子の会話が背中越しに聞こえてくる。

麻衣子「ねえ、もしかしてあの人？この前言ってた、なんか勘違いしてるオバサンって」

哲太「（慌てて）バカ、やめろって！」

ショックを受け、急いで階段をかけおりるみさき。

○ クラブ・店内

客であふれかえっている。

その中をかきわけるようにして歩くあき。

剛を探している。

立ち止まるあき。

あきの視線の先に、他の女の子の肩に手を回して、親しげにしている剛の姿。

あき「（ショックを受け）……」

あきを見つける剛。

剛 「（平然と）よっ」

女の子の肩に回した手はそのままで、あきに片手を上げてみせる剛。

どうしていいかわからず立ちすくむあき。

また平然と、女の子と親しげにふるまう剛。

あき「……」

○街（夜）

所在なげに一人歩くあき。

あきの携帯電話が鳴る。

携帯を取り出すあき。

待受画面。「おかあちゃん」と表示。

少し迷ってから、そのまま電話を切ってしまうあき。

○ 街（夜）

みさき「あのヤロ、なんで出ないんだよ……」

雑踏の中、あきを探して歩くみさき。

前に行く女の子の二人連れ。あきに似ている。

前に回って、女の子の顔を覗き込むみさき。

みさき「あき？」

人違いとわかり、がっかりするみさき。

みさき「すいません……」

女の子「ヤダ、なにこのお婆さん」

連れの女の子「気持ちわるーい」

女の子「（二人で）ギャハハハ」

みさきをばかにして去っていくコギャルたち。

○街（夜）

一人歩くあき。

若い男たちが声をかけてくるが、完全に無視して歩き続けるあき。

背広姿の中年男性、高宮（四十五）が、あきのことをじっと見ている。

あきに、声をかける高宮。

高宮「ねえ、ちょっと君……高校生？」

ぎくり、として思わず立ち止まるあき。

高宮「（ニヤニヤして）ああ、大丈夫大丈夫。おじさんね、警察とかそういんじゃないから。心配しなくていいよ。でもどうしたの？こんな時間に女の子が一人でフラフラしてたら危ないよ」

あき「……」

高宮「あ、もしかして家出してきたとか？」

あき「……」

高宮「おなか空いてるんじゃない？一緒にごはん食べに行こうか。付き合っ  
よ」

あき「えー、でも……」

高宮をまじまじと見るあき。

高宮「（ニヤニヤ）」

どこか父親的なものを、高宮から感じ取るあき。

#### ○ファミレス・店内

向かい合って座っている高宮とあき。

高宮「おじさんにもね、君と同じくらいの娘がいるんだ。だから君みたいな子を見るとどうしても気になっちゃってね」

あき「……」

高宮「何でも好きなもの食べな。遠慮しないでいいから」

あき「（少し安心して）……」

#### ○ラブホテル・受付

高宮に連れられて、あきが入ってくる。

不安げにあたりを見回すあき。

あき「ほんとに何もしないよね？」

高宮「当然だろう。自分の娘みたいな子に変なことなんかできるわけない。おじさんを信用しなさい。君を休ませてあげたいだけだから」

部屋を選び始める高宮。

#### ○同・エレベーターの前

エレベーター扉の前に、高宮とあきが立っている。

扉が開いて、斎藤雄二（みさきの同級生）が、若い女と一緒に下りてくる。  
入れ違いに、エレベーターに乗り込む高宮とあき。  
すれ違う瞬間、二人をチラリと見る雄二。

○街（夜）

あきを探し疲れて、呆然とたたずむみさき。

近くを歩いている雄二と若い女。

雄二「（みさきを見つけて立ち止まり）あれ？みさきじゃね？」

みさき「（顔を上げ）雄二……」

雄二「やっぱりみさきか。ひっさしぶりだなあ。おまえ、何してんだよ、こんな  
ところでポケットとして」

みさき「いや、ちょっとね……」

みさきの携帯電話が鳴る。

急いで、携帯を取り出すみさき。

あきではない。哲太からだ。

みさき「……」

少し迷うが、そのまま切ってしまうみさき。

みさきの携帯の待ち受け画面。

みさきとあきが並んで写っているショット。

雄二「（その画面を何気なく見て）あれっ？この子…」

みさき「なに？あんたなにか知ってるの？」

雄二「（首をひねって）たぶん……」

若い女「（見て）あっ、これさっきの子じゃん」

みさき「（乗り出して）あんたたち、この子に会ったの？」

雄二「いや、さっきちょっと見かけたただけど…（女に）なあ？」

みさき「どこで？どこで見たの？雄二、教えて！」

○ラブホテル・受付

猛スピードで飛び込んでくるみさき。すごい形相。

従業員（男）「（驚いてみさきを見る）？」

奥に進もうとして、従業員に制止されるみさき。

従業員「お客様！」

みさき「離せ！ここに娘が連れ込まれてるんだよ！離せよ！」

従業員の手を振りほどくみさき。

○同・室内

あきが窓際に立って、ぼんやりと夜景を見ている。

なめるような視線で、あきの様子を見ている高宮。

あきに近付いていく高宮。

あきの肩に手をかけて、

高宮「どうしたの。少し休んだら」

あき「（ギクツとして、硬直する）……」

高宮「こっちにおいでよ」

あき「……」

高宮の手を払いのけるあき。

高宮「（もう我慢できないといった感じで）ああ、もうかわいいなあ」

いきなり、あきを抱きしめる高宮。

あき「（衝撃）！」

高宮「（囁く）動かないで。俺のこと、お父さんだと思っていいんだよ。お父さんだったらさ、こういうことしたっておかしくないだろ」

あき「……」

○同・廊下

みさき「あきーっ！あき、どこだーっ？あきーっ！」

大声で叫びながら歩くみさき。

従業員「ちょっとお客様、困りますよ。やめて下さい」

みさきの後を、おろおろしながらついて歩く従業員。

○同・室内

あきをベッドに押し倒し、乱暴しようとする高宮。

あき「やめてよ！何もしないって言ったじゃん。騙したの！」

高宮「大丈夫。怖がらなくていいから。お父さんがいろいろ教えてあげるよ」

あき「嫌だ、やめてよ——」

みさきの声（あき——）

みさきの声にハッとするあき。

○同・廊下

みさき。

あきの声（やめて——！）

廊下にあきの抵抗する声が響き渡る。

みさき「あき？あき、どこだ！」

あきの声がする部屋を特定するみさき。

ドアの前。

みさき「（従業員に）ちよつとここ開けてよ！」

従業員「（困って）いや、しかしですね……」

みさき「（必死で）中に中学生の娘がいるんだよ！早く！」

従業員「ちゅ、中学生？」

みさきの迫力に負け、ドアにキーを差し込む従業員。

ドアが開く。

○同・室内

みさきが飛び込んでくる。

ベッドの上。下半身、ズボンを脱ぎ、パンツ姿の高宮。

抵抗するあき。

男「（みさきに驚いて）何だおまえは！」

みさき「その子を離しな！」

あき「おかあちゃん……」

男「ど、どうなってるんだ。こんなのプライバシーの侵害じゃないか」

みさき「うるせえ！なにがプライバシーだよ。人の大事な娘に……冗談じゃないよ！そんなにやりたきゃな、私が相手してやるよ。ほらどうにでもしな！」

ガンガン服を脱ぎ出すみさき。

高宮「じよ、冗談じゃない。二度と利用しないからな！」

おののいて、パンツ姿のまま慌てて部屋を出て行く高宮。

みさき「忘れもんだよ！」

ズボンを投げつけるみさき。

呆然としているあき。まだ震えが止まらない。

そんなあきを黙って見るみさき。

あきもみさきを見る。

黙ったまま、あきを思い切りひっぱたくみさき。

頬を押さえ、倒れこむあき。

あき「おかあちゃん……」

みさきに抱き付いて泣きじゃくるあき。

みさき「……」

## ○ 公園（夜）

ベンチに座っているみさきとあき。

みさきは缶ビールを飲んでいる。

二人ともしばらく黙ったまま座っている。

みさき「少しは落ち着いた？」

あき「（無言でうなづく）」

みさき「（あきの頬を指し）痛かっただろ」

あき「（無言で首を振る）」

みさき「フフフ……」

と、急に笑い出すみさき。

みさき「そういえばさ……あきの言う通りだったよ。一人で浮かれちゃってバカ  
みたいだよね」

あき「ふられたんだ」

みさき「やっぱりって言いたいんだろ」

あき「（軽く笑う）……」

みさき「（自虐的に）やっぱあれだね。あんたにも言われたけど、いいトシして  
あまりにも男っ気がなさすぎるってのも問題だね」

あき「（真面目な顔で）仕方ないよ。私を育てるのに大変だったんだから」

みさき「あき……」

あき「私もふられちゃった」

みさき「あんた、好きな人いたんだ」

あき「まあね」

みさき「（明るく）はっ、そっか。（急に）そういえば昔「失恋記念日」って歌  
があったよな。あれって誰の曲だっけ……」

あき「知らないよ」

みさき「今日は親子で「失恋レストラン」にでも行くか」

あき「何それ」

みさき「（笑う）」

また沈黙――。

みさき「あきはさ、おかあちゃんと違って、この先いっぱいいい出会いが待ってるんだから。またすぐ好きな人はできるよ。ただ、そのためにも体は大事にしな」

あき「うん……ごめんなさい」

みさき「（缶ビールを差しだし）飲むか？」

あき「いらない。……ってか、未成年に酒勧める親がどこにいんだよ」

みさき「そっか。悪い悪い」

あき「信じられない」

沈黙。

あき「おかあちゃん」

みさき「ん？」

あき「……私、正直言って他のうちがうらやましいなって思ったこと、今まで何回もあるんだ。お父さんがいて、いつも家にいてくれるお母さんがいて、友達んちみたいなそういう普通のうちに生まれたかったなって」

みさき「あき……」

あき「でもね。……でも私、やっぱりおかあちゃんの子に生まれてよかったと思ってる。ほんとだよ。大体、並みの男よりおかあちゃんの方が強いし。頼りになるもん」

みさき「……」

あき「これからも……私だけのおかあちゃんできてくれるよね？」

みさき「バカだね。あんたのおかあちゃんじゃなくて、誰のおかあちゃんになればいいんだよ」

あき「（安心したように笑う）」

あき、立ち上がり、

あき「ねえ、おかあちゃん。久しぶりに一緒に遊ばない？」

みさき「は？」

あき「ブランコ競争やろうよ。昔よくやったじゃない」

みさき「やだよ。この年になってそんなの」

あき「いいじゃん、ねっ、やろうやろう」

嫌がるみさきの手を引っ張り、強引にブランコの所まで連れて行くあき。

仕方なくブランコに乗るみさき。

ブンブンとブランコを漕ぎ出すあき。

つられてみさきも漕ぎ出す。

あき「（こぎながら）おかあちゃんさ、私が結婚するまではちゃんと男作つてよ。そうじゃないと安心してお嫁に行けないからさ」

みさき「（こぎながら）バカにするんじゃないよ。男の一人や二人。これでも昔

は私を取り合って、殺人事件がおきそうになったこともあったんだから」  
あき「（クールに）嘘ばかり」

笑いながら大きくブランコを漕ぐみさき。

つられて笑うあき。

ブランコを漕ぐ二人の影が、公園の街灯に照らし出されている。

○ 二階堂家・茶の間

みさきとあきが朝食をとっている。

相変わらず部屋を占領しているピアノ。

みさき「あき。もうすぐ夏休みだろ。久しぶりに二人で旅行でも行くか」

あき「ほんと？嬉しい！あ、でもお金あんの」

みさき「んなこと、子供が心配すんじゃないよ。たまにはパーツと使わないとね」

あき「じゃあディズニーランド！」

みさき「はっ？そんな所いつでも行けるだろ。どこかこう……ほら、ハワイとかさ」

あき「ディズニーランドがいいの。前からおかあちゃんと一緒に行きたかったんだ」

みさき「そっか……よし、決定！その代わり今度の試験でいい点取ったら。それが条件」

あき「ずるーい。今度は勉強？」

ジャムの蓋を開けようとするあき。

——あかない。

みさき「学生の仕事は勉強——どれ、貸しな」

あきからジャムを受け取るみさき。

力を入れ、蓋を回すみさき。

蓋がパカッとあく。

みさき「ほら」

あき「すごい、バカ力」

みさき「お母ちゃんにかかればこんなもんなの」

時計を見るみさき。

みさき「ヤバッ！遅刻遅刻」

慌てて立ち上がるみさき。

あき「行ってらっしゃい」

みさき「（出掛けに）勉強サボンじゃないよ、勉強。わかった？」

バタバタと出かけていくみさき。

苦笑するあき。

○ 小田島運輸

荷物を詰め込む作業中のみさき。

小田島が来る。

小田島「おう、みさき。今日もしっかり頼むぞ」

言いながら、みさきのおしりを軽く触る小田島。

みさき「セクハラですよ、社長！」

小田島「ハハハ、まあそんな女みたいなこと言うなって」

笑いながら行く小田島。

みさき「……つたく」

哲太が近付いてくる。

哲太「あの、先輩……」

みさき「？」

哲太「これ……（チケットを二枚さしだす）今度、俺が出ることになった舞台の  
チケットです。もしよかったら、あきちゃんと二人で来てください」

みさき「（チケットを受け取り）へえ。舞台。すごいじゃん」

哲太「チョイ役なんですけど」

みさき「絶対行くよ」

哲太「（ホッとして）ありがとうございます！」

ペコリと頭を下げる哲太。

#### ○ 街の雑踏

あきが、美穂たち数人の友達と連れ立って歩いている。

視線の少し先に剛を見つけるあき。

女とイチャイチャしながら歩いている。

あきには気付かずに通り過ぎる剛。

何事もなかったように笑顔で歩き続けるあき。

#### ○ ピアノ教室・中

みさきがレッスンを受けている。

一生懸命弾いているが、すぐに間違えてしまい、全く弾けない。

ピアノ講師「ちょっと指が固いようですね。はい、もう一度最初から」

みさき「すいません……」

また弾き始めるみさき。

下手ながらも真剣。

#### ○トラックの中

ご機嫌で運転するみさき。

「横浜銀蠅」の曲が流れている。

ルームミラーの横。

マスコットがもう一つ増えている。

みさきとあきの二つの人形が仲良く揺れている。

みさきの爽やかな笑顔――。